

メールマガジン「ガゼッタ」まとめ(4)

第16号～第20号(2013年1月25日～3月5日配信)

配信した「ガゼッタ」No.16-20のまとめです。書式と一部表記を変更して図版を取り込み、pdfにしました。



ガゼッタ第16号、配信が少々遅くなりましたこととお詫びいたします。

本号は、「バルチック＝ロッシェニ週間」、東フィル《小荘巖ミサ曲》の感想と余談、今年8月までの例会予定のお話です。

▼「バルチック＝ロッシェニ週間」4月2～7日▼

日本にロッシェニ協会があることは海外のロッシェニ関係者に知られており、さまざまなメールを頂戴します。昨年9月にはナクソスでロッシェニのピアノ作品全集を録音中のピアニスト、アレッサンドロ・マランゴニ(Alessandro Marangoni)から、「2013年3月にアジアでリサイタルツアーを予定し、中国、タイ、たぶん香港でも演奏する。ついては日本でも演奏したいので協力してもらえないか？」とのメールをもらいました。

私は2010年8月にペーザロで彼のリサイタルを聴き、CDも全部持っていますが、個人的評価はいま一つ。それもあって、「日本ロッシェニ協会は小さな団体なので招聘は難しい。2013年はヴェルディ記念年だから、それも絡めてイタリア文化会館に話を持っていてはどうですか」と答え、イタリア文化会館の情報を提供しました。

数日前には、今年4月2～7日にドイツで開催される「バルチック＝ロッシェニ週間」の主催者カタリーナ・トラベルト(Katharina Trabert)さんから、「バルチック海のとても美しい場所で開催します。いらっしゃいませんか？」とのお願いと共に、日本での宣伝と資金援助をお願いされました。

ヨーロッパに住んでいればもちろん馳せ参じますが、室内楽の催しだけで日本から出向くのはちょっと無理。資金援助はともかく、せめて日本での宣伝に協力できればと考え、このメルマガと後日会員に送る通信に「バルチック＝ロッシェニ週間」の案内を掲載することにしました。

詳細はこちら。<http://www.startnext.de/en/baltic-rossini-week>

主催者トラベルトさんのメッセージや、サポーターやスポンサーになるための寄付についてもご覧になれます。なお、寄付や資金援助は各自の自己責任において行ってください。

▼東フィル《小荘巖ミサ曲》の感想と余談▼

去る1月17日と18日、東京フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会でロッシェニの《小荘巖ミサ曲》が演奏され、筆者は18日サントリーホールを覗きました。事前に協会通信にチラシを同封したこともあり、会員の姿も多く見られましたが、広い会場には空席が目立ちました。けれどもダン・エッティンガーの指揮、大規模編成の東フィルと新国立劇場合唱団が、ロッシェニ晩年のモダンイズムを見事に再現してくれました。初日を聴いて「マーラーやショスタコーヴィチの世界！」と驚き、2日目も買った人がいたそうです。

私も時代に先んじたロッシェニの斬新な管弦楽法とエッティンガーの刺激的な演奏解釈を堪能しました。惜しむらくは4人の独唱者——ソプラノ：ミシェル・クライダー、コントラルト：エドナ・プロフニック、テノール：ハビエル・モレノ、バス：堀内康雄——が精彩を欠いたことで、かつてバルチェッローナの歌う終曲で涙を流した筆者としては、プロフニックの「非プロフェッショナル」な歌唱にがっかりさせられました。関係者によれば「ソリストはエッティンガーが選んだ」そうですから、オケと合唱の統御とは別に、ロッシェニの声楽やバルカンリズムに対する理解が指揮者に不足していたようです。

この作品のオリジナル・ヴァージョン(2台のピアノとハルモニウム伴奏)は、アマチュア合唱団のレパートリーにもなっていますが、管弦楽伴奏版の演奏はこれまで日本で2～3回しかないはず……すみません。記憶があやふやで、日本初演やその後の演奏について正確に記すことができません。ともあれ、大変貴重な機会を提供してくれたエッティンガーと東フィルの快挙を称えたいと思います。

ちなみに管弦楽伴奏版の初演はロッシェニの亡くなった翌年(1869年)に行われ、その総譜も同年パリで出版されたものが唯一でした。ロッシェニ・オペラ・フェスティバルでの演奏は1987年8月7日(シャイー指揮)が最初で、ファブリツィオ・シピオーネ校訂による批判校訂版は1999年8月15日に使われました(ガッティ指揮。独唱はノルバルク＝シュルツ、シュコザ、フローレス、ペルトウージで、私も観ています)。今回東フィルが用いたのも同じエディションですが、プログラム解説にある「ロッシェニ全集版(1996年出版の原典批判版)」との記載は不正確で、全集版は現在もお未出版です。正しくは、ロッシェニ財団所蔵の自筆楽譜に基づいてシピオーネが校訂し、1999年に成立したエディション(全集版ではなくリコルディ版)だと思います。

コルブランの書簡も全部チェックしていますから、詳細をきわめて当然ですが、どんなに大部でもちゃんと出版できるから幸せです。日本では「頁数が多い文献は部数が出ない」と出版社に敬遠され、いま書いているロッシェニ伝も記述を切り詰めて縮小することが最大の難関なのです。『ロッシェニアナ』に執筆した大量の論考も、協会 HP にアップしなければ消えてしまうでしょう。「売れなくても価値があるなら出してやる」という奇妙な出版社をご存知の方がおられましたら、ご紹介ください…

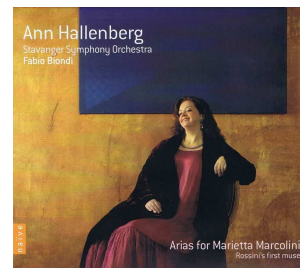
などと話は脱線しましたが、初演歌手のレパートリーを発掘した CD も近年ちらほら現れています。昨年発売されたアン・ハレンベルク のアルバム「マリエッタ・マルコリーニのためのアリア集」もその一つ。

◎Ann Hallenberg / Arias for Marietta Marcolini: Rossini's First Muse

「マリエッタ・マルコリーニのためのアリア集～ロッシェニ最初の女神」

録音：2009年8月スタヴァンゲル Naive V5309 (海外盤 CD)

演奏：アン・ハレンベルク (Ms) ファビオ・ピオンディ 指揮スタヴァンゲル交響楽団および SSO 室内合唱団



《ひどい誤解》《バビロニアのキュロス》《試金石》《アルジェのイタリア女》《シジスモンド》の初演歌手で男装を好んだコントラルト、マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780 頃? [1820 以降没]) については、一定の知識をお持ちのことと思います。ロッシェニより 12 歳ほど年上で恋人だったとされ、昨年例会で上映した映画『ロッシェニ！ ロッシェニ！』ではロッシェニが兵役を免除されたのも彼女が「ひと肌脱いだおかげ」といった描かれ方をされていました。

《アルジェのイタリア女》イザベッラに代表される創唱役に歌手マルコリーニの特質が集約されているのは間違いありませんが、近年はロッシェニの音楽にも彼女のキャリアが影響を与えたものと推測されています。とはいえその証明には、彼女のために書かれたさまざまなアリアを検証する必要があります。

このアルバムにはマイル《イフィジェニアの犠牲》、ヴァイグル《罨》、パエール《愛におけるヒロイズム》、コッチャ《森の女》、モスカ《男たちの中の獣性》、ロッシェニ《ひどい誤解》《アルジェのイタリア女》《バビロニアのチーロ》から全 9 曲のアリアが録音されています (順不同)。過去録音のあるジュゼッペ・モスカ《男たちの中の獣性》のアリアは、ホルン独奏のオブリガートやコロラトゥーラのパッセージがロッシェニに似ており、筆者が 2011 年 10 月 16 日に行った講演「《セビーリャの理髪師》の解説 (ロッシェニの作曲法の特殊性と受容の変遷)」でも紹介済みです。このディスクの世界初録音はそれを除いた最初の 4 人の作品で、ロッシェニ風かどうかの判断は分かれると思いますが、こうした発掘が同時代の歌手と音楽の影響関係を読み解く鍵になるのは間違いありません。ここでは「マニア向き」との前提でお薦めしておきます。

詳細は発売元のサイトをご覧ください。 <http://www.naive.fr/en/artist-ann-hallenberg>

(2013 年 2 月 5 日 水谷彰良)

★★★管理人より★★★

1 月 28 日から 2 月 18 日まで、オランダ・アムステルダム・ネーデルラント・オペラがギヨーム・テルを上演中です。指揮がパオロ・カリニャーニ、演出がピエール・アウディ、そして主役のうち二人は、今年夏のペーザロの公演と同じく、テルがニコラ・アライモ、マチルダがマリナ・レベカです。そのメイキング・オブ・ギヨーム・テルを、劇場のサイトで YOUTUBE で見るができますのでぜひご覧ください。

<http://youtu.be/ut1ECWddNBA>

なお、これはメトロポリタン・オペラとの共同制作とのことですから、今後、メトでの上演の際、松竹の MET ライブビューイングで見ることができるかもしれませんね。



ガゼッタ第 18 号をお届けします。

本号は、連載開始の『オペラの日本初演をめぐる』第 1 回、CD「ロッシェニ：ピアノ付きの室内楽全集」の紹介、来年上演予定の藤原歌劇団《オリー伯爵》に関する話題を提供します。

▼『オペラの日本初演をめぐる』(連載第 1 回) ▼

「日本初演とは何か？」と問われたら、誰もが「音楽や演劇作品などの日本における初演」と答えるでしょう。でも、「初演」とひと口に言ってもその実態はさまざまです。

ヴェルディのオペラ《リゴレット》を例にとりましょう。その日本初演は1918(大正7)年10月25日、駒形劇場で原信子一座が行いました。それはそれで間違いありませんが、イタリア語ではなく、訳詞による日本語の上演です。それだけではありません。マントヴァ公爵に予定された田谷力三が稽古中に他の団体に引き抜かれたため、座長の原信子がこれを男装して歌い演じたのです。田谷力三は日本人初のテノールで、この時点では彼以外にテノール歌手はいませんでした。ですから、自分がジルダを歌いたくて企画した原信子も、やむなく公爵を歌うことにしたのです。

ここでもう一つの問題が生じました。師の三浦環を除けば、当時ジルダを歌える本格的ソプラノもまた、原が唯一だったからです。ではジルダはどうしたのでしょうか？ 推測も交えて言えば、原は座員の中で一番まともな女優にこれを与えましたが、ジルダの登場シーンや歌をたくさんカットしなければなりません。当時の上演は全幕ではなく、抄演もしくは部分上演です。歌を台詞に置き換えることも普通に行われました。ですから歌える人がそれなりに歌い、あとはどうにか体裁を整えたのでしょうか。伴奏も小編成の楽団が行い、総譜ではなくピアノ伴奏譜から使える楽器に合わせて適当に音符を充てました。浅草オペラは団体や公演ごとに楽団の編成が一定でなく、ヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバス、クラリネット、ピアノ、時にトランペットを交え、少ないと5~6人、多くても10数人だったとされています。

マントヴァ公爵を男装ソプラノが歌い、ジルダの出演と歌が乏しく、原曲とは違う伴奏での日本語抄演……これが《リゴレット》日本初演なるものの正体でした。でも1年も満たずして、本格的な上演が実現します。1919(大正8)年夏、それぞれ20人以上のソリスト、管弦楽、合唱団員とバレエ・ダンサー10名からなる「ロシア大歌劇」が初来日したのです(2人の指揮者と舞台監督も同行しました)。彼らが同年9月24日に横浜ゲーテ座した《リゴレット》が、このオペラの本格的な日本初演となりました。

でも、亡命白系ロシア人による「ロシア大歌劇」は、何語で《リゴレット》を歌ったのでしょうか……当時ロシアでは外国オペラがロシア語訳で歌われたので、巡業先の日本も同じはず。となれば、「ロシア語による」という条件付きでの本格日本初演と言わねばなりません。では原語による《リゴレット》日本初演は、いつ誰が行ったのでしょうか……それが1923(大正12)年に来日した「カーピ大歌劇」でした。イタリア人のカルピ率いるカーピ大歌劇は総員約50名でソリストもイタリア人でしたから、彼らが1923年1月27日に帝国劇場で上演した《リゴレット》が原語による日本初演と理解して良いでしょう。

ならば、日本人による本格初演はどうでしょう？ 1932(昭和7)年11月5日、日比谷公会堂にてヴォーカル・フォアが行った《リゴレット》が、大規模な管弦楽の伴奏でこれを全幕上演した最初と思われます。但しこれは訳詞による邦人本格初演です。原語歌唱は1935(昭和10)年10月22日、大阪朝日会館で藤原義江のグループが行った公演が最初となりました。このように「日本初演」と言ってもさまざまな形態があり、《リゴレット》の場合は「ともあれ日本初演」、「原語ではないけれど実質的な本格日本初演」、「原語による本格初演」、「訳詞による邦人本格初演」、「原語による邦人本格初演」の五つのカテゴリーに区分できるわけです。

ここまでは、1月19日に日本ヴェルディ協会で行った筆者講演でも話しました。問題はここから先、ロシーニ作品の日本初演をめぐる諸問題ですが、それは次号のお楽しみとさせていただきます。

▼ロシーニ「ピアノ付きの室内楽全集」▼

◎Gioachino Rossini, Complete chamber music with piano

(ジョアキーノ・ロシーニ、ピアノ伴奏付き室内楽全集)

録音：2011年10月ミラーノ [Concerto CD2076]

演奏：Marco Sollini (pianoforte), Francesco Manara (violino), Massimo Polidori (violoncello), Fabrizio Meloni (clarinetto), Danilo Stagni (corno), Salvatore Barbatano (pianoforte)



今年1月に発売されたCDですが、手元に届いたのを見たら、『ガゼッタ』第7号で紹介したイタリアの新聞付録CDと同じと判りました。不明だった録音データも2011年10月ミラーノと判り、レート・ミュラーによる解説のブックレットも付いた市販品です。筆者はメルマガに、「若く優秀な奏者による演奏は活気があり、モダンな感覚で楽しめます」と書きました。収録曲は「ガゼッタ」まとめ(2)第6号~第10号]をご覧ください。

<http://societarossiniana.jp/gazzetta6-10.pdf>

▼藤原歌劇団《オリー伯爵》上演決定！▼

先日、藤原歌劇団《仮面舞踏会》を観に行ったら、知人から「来年藤原がシラグーザを呼んで《オリー伯爵》をやりますね」と教えられ、驚きました。で、プログラムを見たら、次の予告が掲載されていました。

◎2014年1月31日(金) / 2月2日(日) 東京文化会館(予定)。指揮：アントニーノ・フォリアーニ、演出：松本重孝、主演：アントニーノ・シラグーザ、佐藤美枝子、光岡暁恵ほか出演。詳細は後日発表。

シラグーザはこれが初役とあって楽しみです。とはいえ予告を見て「困ったなあ」と思ったのが、《オリー伯爵》という邦題です。いろんな意味で適正な邦題は《オリー伯爵》で、「Ory」を「オリィ」とするのは原語の

う～ん、ベルカント・コンサートは「若きロッシーニ・スリーテナーズ」で来たか……ヴェルディ記念コンサートは予想どおりだったけど、スケジュール的に難しいかな……

ROFのコンサート情報はこちら。<http://www.rossinioperafestival.it/?IDC=462>

▼お勧め演奏会「マリアンナ・ピッツォラート リサイタル」▼

会員の皆さまに昨年チケット割引のご案内をした「マリアンナ・ピッツォラート メゾソプラノ・リサイタル」。3月4日(月)19時 紀尾井ホールで開催されます(ピアノ:浅野菜生子)。いま一番「旬」で「熟」のロッシーニ・メゾソプラノの魅力をお楽しみください。

詳細はこちら。http://www.tokyopromusica.jp/concert/concert_20130304.html なお、前半最後の《皇帝ティートの慈悲》のアリアは《フィガロの結婚》第1幕ケルビーノのアリアに変更される見込みです。

▼『オペラの日本初演をめぐる』(連載第2回:《セビーリヤの理髪師》の日本初演)▼

前回お話しした「日本初演」の諸形態とカテゴリーが、すべての作品にそのまま当てはまるわけではありません。日本初演が海外からの引越し公演で行われ、それが批判校訂版による完全上演の事例もあるからです。1989年ウィーン国立歌劇場来日公演の《ランスへの旅》、2008年ロッシーニ・オペラ・フェスティバル来日公演の《マオメット2世》がそれに当たります。こうしたケースでは、日本初演に続く「邦人初演」の有無があるだけです。《ランスへの旅》は2000年に日本ロッシーニ協会が舞台形式で行い(註:これに先立つピアノ伴奏の海賊演奏については後日明らかにします)、《マオメット2世》の邦人初演はまだ行われていません。

これに対して話が複雑なのが《セビーリヤの理髪師》です。いつ、どこで、誰が、という情報だけではならず、演奏や歌唱の実態も交えて語る必要があるからです。その日本初演は1917(大正6)年11月13日、赤坂ローヤル館にて、ローシー・オペラ・コミックが《シキルリアの理髪師》もしくは《シキルリアの理髪師》の題名で行いました(この作品の日本語題名の変遷については本誌第11号をご参照ください)。

上演場所のローヤル館は、1912(大正元)年に帝国劇場歌劇部の指導者として来日したバレエ振付師ジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ロージ(Giovanni Vittorio Rosi,1867?)が1916(大正5)年5月に帝国劇場との契約を解消され、資財を投じて設立した劇場です。同年10月1日、赤坂紀尾井町の映画館万才館を大改装して開館、「場内に外国式の飲食の設備を設け」ていたが、当時の法令では劇場新設が困難で、「寄席として許可を取ったため、オペレッタの前に奇術とか講談のようなものを加えなければならなかった」といいます。それでも「オーケストラは20名以上いて帝劇を上回り」「オペレッタの名作を小林愛雄の訳詞、斎藤佳三の美術でほぼ原曲どおりに、1日から25日まで続演して、あとは稽古という良心的な興行」が行われました(増井敬二『浅草オペラ物語 歴史、スター、上演記録のすべて』音楽現代社、1990年、68頁。一部表記を変更して引用)。配役は、ロジーナ:原信子、フィガロ:清水金太郎、伯爵:田谷力三、バルトロ:堀田金星、バジーリオ:茂木信夫、ベルタ:清水静子でした。

それゆえ前回紹介した《リゴレット》の“なんちゃって日本初演”とは違い、訳詞による上演で管弦楽編成が縮小されていることを除けば「訳詞による本格日本初演」と言っても良いでしょう。その後、浅草オペラの諸劇団も演目になりましたが、より縮小した形での上演しか行われません。そして1921(大正10)年9月23日、帝国劇場の昼公演にて、第2回来日の露西亜(ロシア)大歌劇による上演が行われました。これはわが国における本格的なロッシーニ上演の最初と考えられています(増井敬二著『日本オペラ史(上)~1952』)、すべてロシア語で歌われました。

では、原語による《セビーリヤの理髪師》日本初演は、いつ、どこで、誰が行ったのでしょうか。それが1923(大正12)年2月4日、カーピ伊太利大歌劇による帝国劇場の上演です(題名は《セヴィラの理髪師》)。この歌劇団は同年1月26日から2月24日まで、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸で14作のオペラを公演しましたが、《セヴィラの理髪師》は前記2月4日帝国劇場の「昼公演」のみ。つまり、そのたった1回の昼公演が「原語による日本初演」となります。管弦楽は20名以内とされますので、伴奏も縮小されていたと思われます。

もう一つの問題は、《セビーリヤの理髪師》のレチタティーヴォ・セッコがどう処理されたかです。オペラ・ブッフアは楽曲と楽曲の「繋ぎ」が無いと劇として成立しません。ですからレチタティーヴォを用いたか台詞への置き換えがなされたと思われるのですが、露西亜大歌劇とカーピ伊太利大歌劇に関しては確かな情報がありません。日本人による上演では、20世紀半後半のある時点までレチタティーヴォ・セッコを一切用いず、音楽なしの台詞としていました。そして日本の上演でレチタティーヴォ・セッコを用いたのは1953年10月のグルリット・オペラ協会《ドン・ジョヴァンニ》が最初とされるのです。《セビーリヤの理髪師》におけるそれは1963年10月23日、東京文化会館大ホールにおける第4回NHKイタリア歌劇団の上演がおそらく最初でしょう。伴奏楽器は未確認ですが、1963年の《セビーリヤの理髪師》ではチェンバロが使われたものと思います(これについては後日報告します)。

ならばこの1963年第4回NHKイタリア歌劇団《セビーリヤの理髪師》を、「原語によるレチタティーヴォ・セッコを伴う全曲日本初演」と言っても良いのでしょうか。ロッシーニ・ファンなら、「第2幕伯爵のアリアが歌われて初めて全曲上演なのでは?」との疑問を持つはずです。このアリアが歌われていないのは明らかなので、厳密には全曲上演ではありませんが、当時は伯爵のアリアなしでも「全曲」と理解されましたので、そこは問題にしなくても良いでしょう。この話の続きは次号にて。

像をメインに用い、筆者の評価もイマイチでしたが、上演映像で観れば印象はおのずと異なります。歌手はバルチェローナが良いものの、他はみなこれからの人たちですから大目に見てあげましょう。ユロフスキの指揮は期待外れでがっかりしたことを覚えています。

ま、ここは余計なことを言わず、ご覧いただいて自分なりの感想を持たれることをお勧めします。マイナー作品なので筆者による作品解説も臨時に用意しました。

<http://societarossiniana.jp/adelaide.pdf> (PDF版。全作品事典のための下書き)

▼『オペラの日本初演をめぐる』(連載第3回:《セビーリヤの理髪師》のつづき)▼

日本の《セビーリヤの理髪師》上演で伯爵のアリア〈もう逆らうのをやめろ〉が最初に歌われたのは、筆者の認識に誤りがなければ1993年2月11、12、13、14日に藤原歌劇団がBunkamura オーチャードホールで行った公演です(題名は《セヴィリヤの理髪師》)。面白いのは、これが主催者の求めではなく、伯爵役として初来日したロックウェル・ブレイクが「〈もう逆らうのをやめろ〉を歌う」との文言を事前契約に盛り込んだことです(関係者に確認済み)。そのおかげでダブルキャストの五郎部俊朗さんもこのアリアを歌うことができました。

この話でも判るように、1990年代の初めにも〈もう逆らうのをやめろ〉を歌う上演は世界的に稀で、これを得意とするブレイクも契約の際に要求しないと歌えなかったのです。リコルディ社の上演レンタル譜にこのアリアがあり、通常のピアノ伴奏譜にも掲載されているのに歌われない(もしくは歌わせてもらえない)のもおかしな話ですが、とにかくそうだったのです。

5年後の1998年10月に新国立劇場/藤原歌劇団共催公演(題名は《セビアの理髪師》)は、伯爵役のために初来日したラウル・ヒメネスが〈もう逆らうのをやめろ〉を歌わず、ダブルキャストの五郎部俊朗さんも歌えませんでした。ところが2000年2月の新国立劇場/藤原歌劇団共催公演ではブレイクが再来日し、ダブルの五郎部さんと共にこれを歌いました。

先に挙げた1993年の藤原歌劇団公演には、もう一つ重要な試みが行われていました。それがレチタティーヴォ・セッコ伴奏でのフォルテピアノ初使用です。これは筆者が伴奏者の金井紀子さんに提案して実現したもので、チラシには「チェンバロ」とありますが、当日のプログラムではフォルテピアノに変更されました。それゆえこの藤原歌劇団公演は、「〈もう逆らうのをやめろ〉が歌われ、フォルテピアノでレチタティーヴォ・セッコが伴奏された日本初の《セビーリヤの理髪師》」となったのです。

ロッシーニの時代はもはやチェンバロではなくフォルテピアノを用い、1980年に始まるロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルもフォルテピアノを採用していますが、日本では1993年が最初で、これがきっかけとなって前記1998年と2000年の上演でもフォルテピアノが使われました。そしてこれに関する理論的な説明が必要と考えて筆者の書いたのが、「レチタティーヴォの伴奏楽器とロッシーニ時代の用法—使用楽器と演奏様式の変遷、ロッシーニ上演におけるフォルテピアノの使用について」と題した論考です(『ロッシニアーナ』第20号、2001年8月発行)。

これで一件落着と安心したのもつかの間、その後の流れは筆者の予想と正反対でした。藤原歌劇団は2003年《イタリアのトルコ人》で伴奏楽器がチェンバロに戻り、新国立劇場も2005年の《セビアの理髪師》で〈もう逆らうのをやめろ〉が消え、チェンバロに戻ってしまったのです。「カットも楽器の選択も演奏側の自由」と言われればそれまでなので、ここでは単純明快な事実を挙げるにとどめましょう。実は《セビーリヤの理髪師》自筆楽譜の第2幕ロジーナのアリアに、ロッシーニ自身の筆で「ピアノフォルテ」と書かれているのです(表記はPian:Forte。自筆楽譜の複製及び全集版参照)。印刷楽譜のト書きにも、レッスンの場の舞台にピアノがあるとの前提で、「(ロジーナが)ピアノフォルテの上の楽譜を探す」「伯爵がピアノフォルテの席につき、ロジーナの歌を伴奏する」と書かれています(ゼッダ版ピアノ伴奏譜311頁参照)。ですから《セビーリヤの理髪師》におけるフォルテピアノの使用は、歴史様式うんぬん以前に「作品に沿った選択」なのです。でも「ホールに備え付けの楽器を使えば経費が安く上がる」とか、「指揮者が指定した」などの理由でチェンバロが使われるのもまた事実で、個人的には「物のわかる人が増えればおのずと解決する問題」と捉えています。

話がそれましたが、我が国における《セビーリヤの理髪師》が1917(大正6)年の「訳詞による本格日本初演」に始まり、前回お話したさまざまなタイプの日本初演を経て1993年の「全曲演奏&フォルテピアノ使用による日本初演」に至ったことは覚えておいてください。なお、日本の上演でロジーナをメゾソプラノが歌ったのは1970年二期会の莊智世恵が最初とされ、1993年もメゾソプラノでしたが、その後はソプラノとメゾソプラノをダブルとするなど公演ごとに声種の選択に違いがあります。正式な全集版の初使用は2011年9月の藤原歌劇団公演(《セビーリヤの理髪師》。ゼッダの指揮で再びフォルテピアノを使用)ですが、この全集版の特色である「リーザ役」が登場しないなど、中途半端な上演でした。その辺の「重箱の隅」をつつき出すと話が終わらないので、ここで止めておきます。

(2013年3月5日水谷彰良)